

# 「歓喜の歌」を

新型コロナウイルスの影響下でも年の瀬恒例の「第九」を実現しようと、高崎市民らでつくる高崎第九合唱団（赤羽洋子団長）が感染防止に留意しながら本番に向けた練習を本格化している。メンバーはコンサートを成功させ、コロナ終息に向けたメッセージを発信しようとしている。

## 高崎第九合唱団 コロナ負けぬ



練習する高崎第九合唱団のメンバー

### 来月公演へ練習本格化

12月13日の本番会場となる高崎芸術劇場（同市）での初めての全体練習となった10月29日夜、約120人が間隔を取りながら客席に立った。全員の顔には、発声時の飛沫量を抑制しながら歌いやすいよう、工夫されたマスク。ピアノに合わせた男女の歌声がホールに響いた。

群馬交響楽団の演奏に合わせ、同合唱団がベートーベン「交響曲第九番」を歌うコンサート。47回目となる今年はコロナ禍に見舞われ、開催をためらった。群響によると、高崎以外の地域で予定されていた合唱団との「第九」は5カ所あり、いずれも断念。しかし、高崎は毎年続けてきた風物詩を

途切れさせたくない、開催に踏み切ることにした。団員の3分の2程度に当たる約120人は、歌への思いを書き合って参加する。例年6月から集まって練習するが、インターネットを活用してオンラインで行ったほか、実際に集まる場合もパートごとの練習に抑えた。本番は、通常なら合唱団の前にいる群響団員が背後に座り、客席の一部も使用して歌う予定だ。

コンサートは新型コロナウイルス対策支援とし、会場で淨財を募り、観覧人数も抑える。コロナ終息に向けた「歓喜の歌」を響かせ、後世に語り継がれるものにしたと考えて。感染状況次第で開催に不透明さはあるが、赤羽団長は「群響や劇場とも知恵を出し合っている。皆でコロナ禍での第九を成功させたい」と意気込んでいる。